

動詞*arrive*の意味について

田辺 英一郎

Semantics of a verb *arrive*

Eiichiro TANABE

(Received on Jan. 31, 2025)

キーワード：語彙的意味、アスペクト強制、相動詞

1. はじめに

本稿は、英語動詞*arrive*の意味について考える。具体的には、この動詞に結果持続の意味へのアスペクト強制 (aspectual coercion) が適用されない理由を探る。アスペクト強制とは、副詞などの共起により、動詞の語彙的アスペクトが、共起する語句と意味的に整合するように別のタイプに変わることである (Jackendoff 1997など)。アスペクト強制には、完結的意味→持続的意味と、持続的意味→完結的意味の二通りの意味変化があるが、本稿が取り上げるのは前者である。以下、具体例を示す。本稿全体に通じることだが、出所が明示されていない例文は、全て作例である。

- (1) a. He opened/closed the door for an hour.
b. He came/went to the city for a week.

(a)は状態変化動詞、(b)は移動(位置変化)動詞の例である。語彙的意味では、*open/close*は結果状態への到達、*come/go*は結果位置(着点)への到達を表すと見るのが普通なので、どちらも完結的意味が基本である。しかし、これらに持続時間を表す副詞*for x time*が共起すると、動詞の意味とこの副詞の意味が整合するように、完結的意味が持続的な意味に変わる。

一方、*arrive*は、このような副詞が共起してもアスペクト強制が適用されない。

- (2) * The train arrived at the station for an hour.
cf. *電車が駅に1時間着いた。

電車が駅に着いてそこで1時間停車し、その後また発車するというのは、現実世界の出来事としては十分あり得る。現実世界の出来事として十分あり得ることを表すという点は、容認可能な(1a, b)と同じである。また、*come/go*については、内在的有方向動詞 (verbs of inherently directed motion) というクラスに属する点で*arrive*と共通している (Levin 1993など)。しかし、*arrive*を使った(2)は、言語表現としては容認し難い。本稿は、*arrive*がこのような振る舞いを示すのは、この動詞が一種の相動詞 (aspectual verb) であることに起因すると考える。

2. 先行研究の検討

本節では、本稿の扱う問題に関連する先行研究を検討する。Pustejovsky(1991)は、持続的意味へのアスペクト強制が適用される条件として可逆性 (reversibility) を挙げている。可逆性とは、結果状態が元の状態に戻るかどうかのことであり、世界知識に基づく語用論的概念である。以下、具体例を示す。

- (3) a. * The glass shattered for a day.
- b. * The man died for a day.

世界知識から判断すると、砕けたガラスが元に戻ることも、死んだ人が生き返ることもあり得ない。ここでの * は、語用論的に容認不可能であることを表す。一方、いま前節でも触れたことだが、「何かがある場所に着いた後にそこにいる」という状態は、その何かが移動すれば元の状態（それがそこにはいない状態）に戻ると普通に考えることができる。よってarriveは、可逆性という条件を満たしていると言えるが、持続的意味へのアスペクト強制がなぜか適用されない。これは、arriveという動詞の意味の特殊性に起因するのではないかと本稿は見ている。

影山(1996)は、語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) を使い、述語関数の焦点という観点から完結的意味の動詞の持続的意味への変化の可否を説明している。影山は、Vendler(1967)などに従い、動詞を状態 (state)、活動 (activity)、到達 (achievement)、達成 (accomplishment) に分類し、arriveは到達動詞と見なしている。影山が提案する到達動詞の語彙概念構造は、BECOME [y BE AT-z]という形で表示される。これは「参与者yが状態zである／位置zにいる、という事態が生じる」という意味を表す。

こうしたことを踏まえ、以下の例を見られたい。

- (4) a. In the magic show, the young lady disappeared in a second.
- b. The young lady disappeared for some time and then reappeared. (ibid: 59)
- (5) a. The train arrived in an hour.
- b. * The train arrived for an hour. (ibid: 57)

BECOME [y BE AT-z]に基づいて説明すると、同じく到達動詞であるdisappearの場合、in a second、for some timeは、それぞれBECOME、BEを修飾する。これが可能なのは、BECOMEにもBEにも焦点を当てることができるからである。他方、到達動詞arriveはBECOMEに焦点が固定されているので、in an hourはBECOMEを修飾できるが、for an hourはBEを修飾できない。このため、arriveは持続的意味へのアスペクト強制が適用されない。両者の違いを示すために、arriveの意味はBECOME [y BE AT-z]という形で表示され、太字の部分はここに焦点が固定されていることを明示している。

影山(1996)は、語彙概念構造という意味分解表示を使って説明しているの、動詞の意味の中身に大きく踏み込んでいるという点で精緻な説明と言える。しかし、この説明には不十分なところもある。この説明では、arriveの意味表示のBECOMEに焦点が固定されている、という提案が特に大切なところだと本稿は見ている。よって、この提案が納得のいく恣意性のないものであるためには、arriveのBECOMEに焦点が固定されていることへの根拠を、時間副詞in x time、for x timeの共起の可否以外に示す必要がある。しかし、影山はこうした根拠に言及していない。これでは、精密な意味表示を用いているものの、言語事実につじつまを合わせているようにも思われる。ただし、すぐ後に述べることに関係があるが、BECOMEに焦点つまり意味の重点があるという指摘は、この動詞の意味を考える上で重要だと本稿は考える。

3. 本稿の試案

本節では、この問題への本稿の説明を試みる。まず参考にしたいのは、出水(2017)である。この論文は、arriveに持続的意味へのアスペクト強制が適用できないことには触れていないが、arriveの意味を詳細に分析している。

出水によると、*arrive*は、ある場所への移動という因果連鎖のうち、きわめて小さな終わりの部分のみがその語彙的意味になっている (ibid: 59、下線は筆者による)。この説明は、*arrive*は移動という出来事の終わりに意味の重点があることを示唆している。いま上で紹介したBECOME [y BE AT-z]のBECOMEは、移動動詞に当てはめると、移動が終わるという意味に相当する。よって、ここに焦点つまり意味の重点が固定されているという影山(1996)の提案は、根拠が十分ではないが、出水の説明と整合していると言える。

ここで着目したいのは、英英辞典に記述された*arrive*の定義である。以下、これを示す。

- (6) arrive : to get to a place, especially at the end of a journey (OALD⁸)
 : to reach a place, especially at the end of a journey (LDOCE⁵)
 : When a person or a vehicle arrives at a place, they come to it at the end of a journey. (COBUILD⁵)

下線は筆者によるものだが、いずれもthe end of a journey「移動の終わり」という記述を含んでいる。また、最初の二つは*especially*という副詞でこの部分が強調されている。よって、これらの定義からも、*arrive*は移動という出来事の終わりに意味の重点があると言える。本稿は、*arrive*の意味を出来事の終了が主で移動が従と捉え直し、次のような意味構造を提案する。

- (7) [x FINISH [MOVE] AT y]

移動の意味を MOVE で表すところは、影山(1996)を踏襲している。この表示は、「参与者 x が場所 y で移動を終える」という意味を表す。*arrive* を移動の意味を含む一種の相動詞と見なしているのがこの表示の特徴である。相動詞とは開始、継続、終了の意味を表す動詞をいうが、本稿に関係するのは開始と終了の意味の相動詞である。

この表示を使えば、着点を表す前置詞との共起関係が説明できる。*arrive* は、同じクラスに属し意味が類似する *come/go* と異なり、*to* ではなく *at/in/on* と共起することが広く知られている。

- (8) a. The train arrived at/*to the station.
 b. He arrived in/*to the city.
 c. The actor arrived on/*to the stage.

(7)では、FINISHがMOVEより構造的に上位にあるので、移動の意味より終了の意味が優先される。このため、*the station/the city/the stage*は、着点というより移動という出来事が終了した場所を表す。出来事が終了した場所を表すのなら、*to*ではなく*at/in/on*などの必ずしも移動を表さない前置詞が使われる、と考えるのが自然だろう。

*arrive*に持続的意味へのアスペクト強制が適用されないのは、この動詞が一種の相動詞であることに起因する、というのが本稿の提案である。ここで、*arrive*と意味が対照的でかつ同じく有方向移動動詞のクラスに属する、*depart*にも着目したい。*depart*は、*arrive*の反意語と見なされ (OALD⁸)、*arrive*と同じく移動を表すが持続的意味へのアスペクト強制が適用されない。

- (9) *The train departed from the station for a day.
 cf. *電車は1日駅から出発した。

この例は、「電車が駅を出発し、これが駅にいない状態が1日続き、また駅にいる状態になった」という意味を意図している。これは現実世界においてはあり得るので、上で述べたPustejovskyの可逆性条件を満たしているが、(9)は言語表現としては容認し難い。ここで、英英辞典によるこの動詞の定義を見てみよう。

- (10) depart : leave, especially in order to start a journey (OALD⁸)
 : to leave, especially when you are starting a journey (LDOCE⁵)
 : When something or someone departs from a place, they leave it and start a journey to another place. (COBUILD⁵)

下線は筆者によるものだが、いずれも*start(ing) a journey*「移動が始まる（こと）」という記述を含んでおり、さらに最初の二つはこの部分（を中心とする句／節）が*especially*という副詞によって強調されている。これらの定義は、*depart*は移動という出来事の開始に意味の重点があることを示唆すると言える。本稿は、*depart*の意味を出来事の開始が主で移動が従と捉え直す。ただし、*arrive*は着点を表す前置詞*to*と共起できないのに対し、反意語の*depart*は、場所を表す前置詞ではなくむしろ起点を表す前置詞と共起する。

- (11) The train departed from/*at the station.

この点も考慮し、次のような*depart*の意味構造を提案する。

- (12) [x START [MOVE FROM y]]

この表示では、FROM yという形でyが起点であることが既に組み込まれているので、場所を表す*at*などの前置詞が共起できないことが説明できるだろう。また、STARTがMOVEより構造的に上位にあるので、移動の意味より開始の意味がより重要であることが示されている。

繰り返しになるが、*arrive/depart*に移動の終了／開始後の状態の持続という意味へのアスペクト強制が適用できないのは、これらが一種の相動詞であることに起因する、というのが本稿の提案である。しかし、この提案がより説得力があり恣意的でないものにするためには、これに対する根拠を示す必要があるだろう。直感的には、終了／開始の意味を表す動詞が、終了／開始後の状態や動作の持続の意味を表せないことは、「当然」のことにも思われるが、本稿は次のように考える。まず、以下に相動詞そのものの例を示す。

- (13) a. * The man finished running/singing/dancing for an hour.
b. * The man started running/singing/dancing for an hour.

意図している意味は、それぞれ、「男性が走り／歌い／踊り終えて、その動作をしていない状態が1時間続いた」と「男性が走り／歌い／踊り始めて、その動作が1時間続いた」である。両者とも、現実世界ではあり得ることであるが、これらは言語表現としては容認できない。

本稿は、*arrive/depart*にアスペクト強制ができない理由は、(13a, b)が容認できない理由と基本的に同じではないか、と見ている。*finish/start*は、ある状態や動作が終了／開始することを表すので、時間軸に沿った事象の推移を明示するように表すと、それぞれ「 $e \rightarrow \neg e$ 」、「 $\neg e \rightarrow e$ 」となるだろう。この事象の切り替わりがまさに、相動詞*finish/start*の中核的な意味と本稿は考える。切り替わりは瞬時的に起こると解釈されるので、持続的意味とは整合せず、したがって、(13a, b)は容認できないと説明できるだろう。本稿は*arrive/depart*も一種の相動詞と見るので、これらも事象の切り替わりという中核的意味を含み、したがって持続的意味へのアスペクト強制が適用されない、と考えられる。

4. おわりに

以上をまとめると次のようになる。動詞*arrive*は、同じく有方向移動動詞である*come/go*などと異なり、持続的意味へのアスペクト強制が適用できない。これは、この動詞が（移動の終了を表す）一種の相動詞であることに起因する。反意語の*depart*も、（移動の開始を表す）一種の相動詞であり、同じくアスペクト強制が適用できないことはこれに起因する。終了／開始を表す相動詞は、それぞれ「 $e \rightarrow \neg e$ 」、「 $\neg e \rightarrow e$ 」という事象の切り替わりを表し、この事象の切り替わりが意味の中核をなす。切り替わりは瞬時的と解釈されるので、持続的意味と整合しない。*arrive*、*depart*も、一種の相動詞なので、中核的意味としてこうした切り替わりの意味を持ち、したがって持続的意味とは整合せず、この意味へのアスペクト強制が適用されない。

参考文献

著書・論文

- 出水和典 (2017) 「「着く」「到着する」と訳されないarrive」『立命館英米文学』第26号, 52-76. 立命館大学英米文学会.
- Jackendoff, Ray. (1997) *The Architecture of the Language Faculty*, MIT Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版.
- Levin, Beth. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, University of Chicago Press.
- Pustejovsky, James. (1991) “The Syntax of Event Structure,” In Beth Levin and Steven Pinker (eds.) *Lexical and Conceptual Semantics*, 47-81, Blackwell.
- 田辺英一郎 (2011) 「テリック動詞に結果持続の意味が成立する条件」『鶴岡工業高等専門学校研究紀要』第46号, 23-32.
- Vendler, Zeno. (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.

辞書

- Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary*, Fifth Edition (2006) HarperCollins Publishers. (COBUILD⁵)
- Longman Dictionary of Contemporary English*, Fifth edition, (2009) Longman. (LDOCE⁵)
- Oxford Advanced Learner's Dictionary*, Eighth edition (2010) Oxford University Press. (OALD⁸)